

2022年01月06日

### 博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 角田 ますみ  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目（和文） 介護福祉士における倫理教育の現状に関する研究  
論文題目（英文） Study of the Current States of Care Workers' Ethics Education

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2021年12月03日・16:00-17:30  
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	辻内 琢也	博士（医学）	東京大学	医療人類学
副査	早稲田大学・教授	扇原 淳	博士（医学）	順天堂大学	社会医学
副査	早稲田大学・教授	森岡 正博	博士（人間科学）	大阪府立大学	哲学・倫理学

論文審査委員会は、角田ますみ氏による博士学位論文「介護福祉士における倫理教育の現状に関する研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：介護福祉士の倫理教育は現場に即した実践が重要ということだが、教育内容と教材の関係は基本的に分けて論じる必要があると思うが、どう考えるか。

回答：本論文では、介護福祉士養成課程におけるシラバス調査と教材のテキスト調査を行ったが、何がどのように教えられているかという教育内容の分析までは行えていない。現在、申請者は新たな科研費を獲得し、介護倫理教育方法の開発に着手しており、今後何らかの形で成果を提示できるようにしたい。

1.2 質問：「倫理とは何か」という考察が深めきれていない。文献検討も重要だが、それ以上に申請者自身が倫理とはこういうものだとして明確に打ち出す必要がある。

回答：本論文では先行研究による倫理の定義を用いたまま具体的事象の議論に移ってしまっている。生命倫理学の基本に立ち返り、様々な定義を踏まえながら自分なりの考えを再度検討して提示したい。

1.3 質問：実存援助技術という言葉が出てくるが、実存とは何かという説明がない。

回答：実存援助技術という言葉は、介護の専門性や業務内容に関する文献で頻出する言葉である。日常生活という具体的な状況における生命や人生をより豊かにするための援助を示している。実存という言葉自体は先行研究でよくみられるためそのまま用いたが、実存の意味を再解釈し、他の言葉で言い換えることが可能かどうかを検討し修正する。

- 1.4 質問：近接領域である看護倫理との比較があれば、介護倫理の特徴が強調できたのではないか。

回答：申請者は看護学部で看護倫理教育に携わっており、当初は看護倫理との比較を視野に入れていた。しかし、看護との比較でかえって介護の独自性が見えにくくなると考え、介護の内側の視点から専門性を探索した。しかし今後、介護福祉士にも喀痰吸引などの一部の医行為が許可され、終末期にも対応せざるをえなくなり、医療・看護・介護倫理の領域がさらに接近した問題も出現してくるため、この比較は今後の研究課題としたい。

- 1.5 質問：第5章の質問紙調査では、倫理的問題とはこういうものであるという前提が載せられていないので、この回答は回答者の自己認識になるのではないか。

回答：現場で働く介護福祉士がどのようなことを倫理的問題としてとらえているのかを把握するため前提は提示しなかった。しかし、何らかのガイドを提示すれば、違った結果が得られた可能性も十分にある。この点については本研究の限界として論文内に追加する。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 主に第2章の「介護における倫理」で、専門的な事典や文献をふまえながら、申請者が考える倫理とは何かをしっかりと定義して記述すること。
- 2.1.2 第2章の「実存的援助」の実存とは何か、再度文献を参照・解釈し直し、本論文の示す介護領域の実存とは何かを明確にすること。
- 2.1.3 第2章の修正と照らし合わせて、なぜ倫理的問題といえるのかについての考察を第5章に加える。また倫理的問題が個人の認識による点も研究の限界として追記すること。
- 2.1.4 終章の「本研究の限界と今後の展望」に、質問 1.1、1.4、1.5 で出された課題について追記すること。
- 2.1.5 本論文は介護福祉士の倫理教育を主としており、研究題目は「介護福祉士における倫理教育の現状に関する研究」の方が内容を適切に表していると思われるので変更すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 「介護における倫理」について申請者自身の定義が提示された。
- 2.2.2 文献を再解釈して本論文の示す実存について追記された。
- 2.2.3 第2章の追記と、第5章での具体的な倫理的問題の根拠の考察が追記された。

- 2.2.4 終章の最後に「本研究の限界と今後の展望」として3点が追記された。
- 2.2.5 研究題目が、和文「介護福祉士における倫理教育の現状に関する研究」、英文「Study of the Current States of Care Workers' Ethics Education」に変更された。

### 3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：超高齢社会の担い手である介護職にとって倫理観は重要であるが、現行の研修は基礎的知識の伝授にとどまり、現場での問題解決に結びついていない状況がある。そこで本論文では「現場で活躍する介護福祉士にとっての望ましい倫理教育のあり方を検討し、その手がかりを提示すること」が研究目的として提示された。さらに5つの明確な Research Question を設定し順を追って明らかにする構成をとっており、研究目的の明確性と妥当性があると評価できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、丁寧な文献・資料調査、介護福祉士養成課程におけるシラバス及びテキスト調査、現場で働く介護福祉士を対象にした量・質を混合させた全国調査を行っている。段階的で順序性のある研究計画、妥当な対象及び研究方法の選定であり、方法論は明確かつ妥当性があると評価できる。

なお、本論文で実施した実験の手続きについては、杏林大学倫理審査専門委員会の承認を取得し（承認番号 27-22）、調査の前には参加者に対して調査内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果は、日本生命倫理学会学会誌である「生命倫理」に2本の原著論文、1本の報告論文として掲載されており、研究成果の明確性かつ妥当性が証明されている。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
  - 3.4.1 教育体系が発展途上にある介護福祉士に焦点を当てた点に独創性がある。先行研究では、医師・看護師・薬剤師などに対する倫理教育研究は数多く報告されているが、介護福祉士の研究はいまだ未踏の領域である。
  - 3.4.2 これまでの生命倫理学研究では、実際に現場で働く介護福祉士の全国調査を通して介護における倫理と倫理教育の現状を明らかにした研究は管見の範囲では見当たらない。本研究は介護福祉士の倫理研究の嚆矢となるだろう。
  - 3.4.3 これまでの生命倫理教育は、臓器移植や生殖医療などの医療現場に特徴的なトピックが主流として扱われてきたが、本論文では介護の専門性を「生活支援」にあるとし、具体的な生活に基づいて倫理教育を考えていく必要性が述べられている点が、新規性として評価できる。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
  - 3.5.1 介護における倫理を専門性としての「生活支援」に見出し、実際の介護場面

や行為に着目しながら具体的に論じており、介護福祉士における倫理教育の方向性を具体的に示しており学術的意義がある。

- 3.5.2 現職の介護福祉士の倫理教育ニーズを明確化しており、今後のカリキュラム論及び教育教材論にも重要な示唆を与える学術的・社会的意義がある。
  - 3.5.3 倫理教育に求められる具体性と応用性の確保、基礎及び現任教育の相互連携、介護に焦点化した倫理教育の提示は、発展途上にある介護福祉士養成教育の構築に重要な示唆を与えるものとして学術的・社会的意義がある。
  - 3.5.4 生命倫理学の学術的観点からも、介護現場における倫理的問題を克明に描き出し、対人援助職としての倫理の重要性を示す学術的価値のある内容である。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 本論文は、生命倫理学分野における業績を主としているが、同時に介護学・医学・看護学・社会福祉学・教育学といった学際的な視点から対人援助職のあり方に深く切り込んでおり、「生活支援」というケアの文脈における人間同士の相互交流のあり方を描いており、人間科学にしか成し得ない価値のある成果だといえる。
  - 3.6.2 本論文では、シラバス調査によって見出された新たな知見を検討するためにテキスト調査が行われ、それをふまえて具体的な介護現場における倫理的問題と教育内容を明らかにするために量的調査と質的調査の混合法がとられている。このような段階的な研究方法の実践は、人間科学の発展に貢献できる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）及び本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・角田ますみ(2016):シラバスからみる大学における介護福祉士養成課程の倫理教育. 生命倫理, 26(1), 35-45 [原著・査読有]
- ・角田ますみ(2017):介護施設に勤務する介護福祉士の倫理的問題の認識や対処と倫理教育の現状. 生命倫理, 27(1), 26-38 [原著・査読有]
- ・角田ますみ(2018):介護福祉士養成課程(4年課程)における介護倫理教育-介護科目で講義される倫理的内容の分析を通して-. 生命倫理, 28(1), 75-86 [報告論文・査読有]

## 5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上